

紙季折々

しき*ありあり

日本製紙グループ

環境・社会コミュニケーション誌

Vol.7

夏



子どもにとって、自然は今も身近ですか？

急速な経済発展とともに、環境変化が進み、豊かな緑や恵みの田畑、澄んだ清流や海は、必ずしも身近な存在とは言えなくなりつつあります。現代人にとって、経済問題と同様、自然との共生は大きな課題です。未来を担う子どもたちに、自然とのふれあいや小枝からの紙づくり体験を通じて、自然の恩恵について伝えたい。今号では、日本製紙グループが進めている「森と紙のなかよし学校」の取り組みをご紹介します。



高度経済成長を迎える以前、子どもたちは野原で、川辺で、山で、自然とふれあう機会に恵まれていました。1950年代の小学生の遊びは、「なわとび・鬼ごっこ・野球」などの外での遊びが中心(※1)。ところが、現在では「テレビ」や「テレビゲーム」など室内で過ごす遊びに様変わりしています(※2)。また、別の調査(※3)では、これまでの経験で虫をつかまえて遊んだことがないと答えた小学生が4割に上るなど、遊びを通じて自然とのふれあいはすっかり縁遠くなつたようです。環境問題と向き合うには、自然の大切さを理解していなければなりません。自然への畏敬の念は、子ども時代の経験から育まれていくものです。現代っ子たちは、自然と接する機会が乏しいまま、や

が深刻な環境問題に向き合っていかなければならないのです。

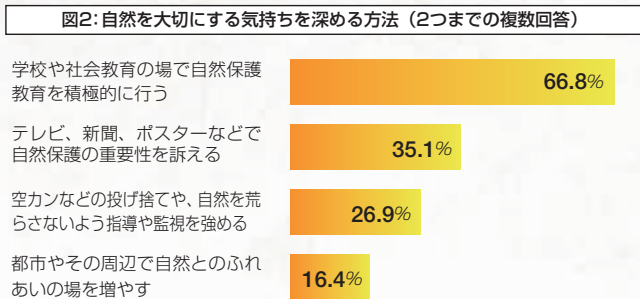
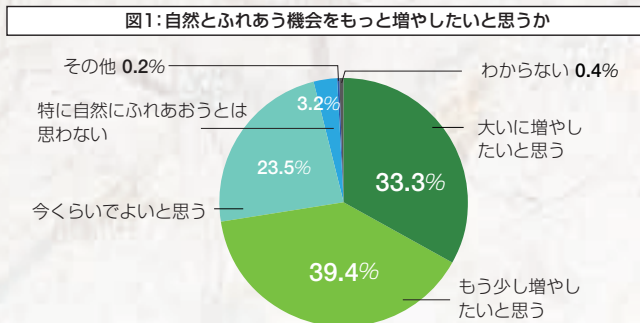
自然とふれあう機会すら充分に得られていない子どもたちに、私たち大人は何ができるでしょう。自然の保護と利用に関する世論調査(※4)によると、「自然とふれあう機会をもっと増やしたい」と考えている大人は全体の7割に達し、自然に対する関心の高さを示しています。また、『自然を大切にしている方法』についての問いでは、『学校や社会教育の場で自然保護教育を積極的に行う』という回答への支持が最も多く寄せられました。自然の大切さを実感するとともに、その伝達手段として、環境教育への大きな期待が浮き彫りになったのです。

※1 厚生白書(昭和54年版)

※2 青少年の生活と意識に関する基本調査(平成12年度調査/内閣府)

※3 第一回子ども生活実態基本調査報告書(ベネッセ教育研究開発センター)

※4 自然の保護と利用に関する世論調査(平成18年6月調査/内閣府) 20歳以上を対象。



「森と紙のなかよし学校」開校の思い

日本製紙グループは、木を原料とする製紙業を営みながら、自然の大切さを肌で感じてきました。業界全体では、原材料の60%以上を古紙でまかない、原材料として使う木も植林木や森林認証材といった持続可能な森林からの調達を進めています。つまり、紙が紙として生まれ変わり、森が森として生まれ変わる資源循環型の産業を作り上げています。

自然と共生してきた企業として、自然のすばらしさや持続可能な社会を構築する大切さを子どもたちに

伝えていかななくてはならない。そのような思いから2006年6月に始めたのが自然環境教室「森と紙のなかよし学校」です。

「森と紙のなかよし学校」スタッフの声

子どもたちの安全には細心の注意を払っています。

「森と紙のなかよし学校」には丸沼高原で開催した第1回の準備段階から携わっています。担当している「小枝からの紙づくり」のプログラムでは、小枝を削って木材チップにする作業があるのですが、野菜の皮むき器やナイフ、大型カッターなど、ありとあらゆる道具をリハーサルで試して決めました。チップを煮るための薬品も安全である程度の効果が見込めるものを選びました。親御さんから大事なお子さんを預かる以上、安全面には細心の注意を払っています。



日本製紙(株) 研究開発本部 研究企画部 今野 明子



☆2 星空観察

夜空を見上げながら、星にまつわるエピソードに耳を傾けます。ガイドはもちろんスタッフです。自然の夜空を使ったプラネタリウム体験です(丸沼高原 開催時)。

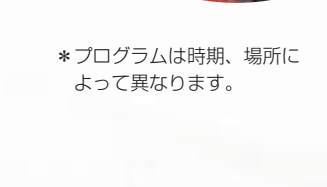


☆3 小枝からの紙づくり

参加者自身の手で、山の小枝を拾い、それをもとにパルプを作ります。その後、準備しておいたパルプと混ぜ合わせ、紙を漉いて自分だけのオリジナルのがきを作ります。



*プログラムは時期、場所によって異なります。



丸沼高原から豊野へ広がる取り組み

☆1 森林ウォーキング

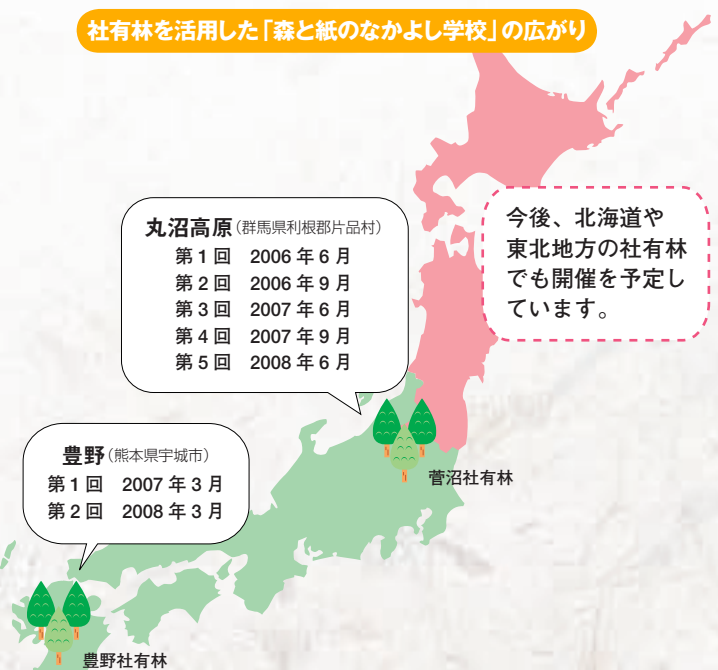
社有林を歩きます。スタッフ自らが森林ガイドを務め、山歩きのポイントや、植生などについて解説します。特に菅沼社有林はゴール付近の池でクロサンショウウオ(写真上)も見ることができる豊かな自然も見どころです。



「森と紙のなかよし学校」は、これまで200名を超える小学生とご家族、地元の高中生などが参加し、おかげさまで大好評をいただいています。第1回の開催地となった菅沼社有林(群馬県利根郡片品村)を利用した「丸沼高原 森と紙のなかよし学校」は、すでに今年で第5回を数えました。さらに昨年3月から豊野社有林(熊本県宇城市)を会場に九州でも開催され、今後は北海道や東北など他地域にも広げていく予定です。

子どもたちは自然への興味を決して失っているわけではありません。社会環境や教育課程の変化で接する機会を逸しているだけなのです。「森と紙のなかよし学校」のアンケートには、自然に対して興味を持つようになった子どもを喜ぶご父兄の声も寄せられています。自然の恵みに感謝しながら、自然を上手に活用し、自然と共生する。こうした持続可能な社会を構築する大切さを、なかよし学校の取り組みを通じて、未来を担う子どもたちに伝えていきたいと考えています。

社有林を活用した「森と紙のなかよし学校」の広がり



アンケート:「森と紙のなかよし学校」に参加して(保護者から寄せられた声)

- 紙を大事に使うようになったし、古紙リサイクルに協力してくれるようになった。
- 星や太陽の話を自分からするようになった。
- 雨でも晴れでも楽しめるように、とても工夫されていました。
- 木の皮はチップにならないことを初めて知りました。
- 森にはいろんな生物がいて面白いことが実感できたと思います。
- 子どもが刃物を上手に使うことができて良かったです。
- 森の持つ力や森に生きる生物について興味を持てた。
- 毎回、星の話は楽しいです。子どもも星座には興味がありましたが、今回、惑星にも興味を持ちました。
- 子どもたちの目を見れば、何も言う事はないと、誰もが知るはず!





PROFILE

あらまた・ひろし

1947年東京生まれ。慶應義塾大学法学部卒業。小説家、博物学者、翻訳家、神秘学研究科、収集家などさまざまな顔を持つ。70年に日魯漁業(現マルハニチロホールディングス)入社。サラリーマンの傍ら、翻訳家としても活動。79年に同社退職後「平凡社世界大百科事典」の編集に参加。「帝都物語」で日本SF大賞を受賞。「世界大博物図鑑第2巻・魚類」でサントリー学芸賞を受賞。著書は約300冊に及ぶ。

紙は驚くようなパワーを持っている汎用性の高い素材です。

小説家、博物学者、翻訳家として、さまざまなジャンルで活躍している荒俣宏さんに、日本独特の紙文化について語っていただきました。

イエズス会宣教師のルイス・フロイスが日本人の変な特質というのを列挙してある著作物があって、日本人は洩(はな)をかむのに紙を使っていて驚いたということが書かれているのを読んだことがあります。外国だとハンケチで拭くんですけど、日本人は紙を使っていて驚いているわけです。昔は紙は記録用紙として存在した高価なもので、とても洩をかんだり、まして尻を拭くなんていうことは西洋人には考えられないことだったんですね(笑)。

また、江戸時代の文献を読むと、日本の家は障子や襖といった紙でできていて非常に不思議な国であるということが書いてあって、意表をつかれたことがあります。我々は普通だと思っていることが当時の西洋人にとっては驚くべきことだったんです。

ある時、紙を単なる文具じゃないというふうを意識変革したおかげで、日本では紙の使い方がものすごく広がったわけで、この点が日本の紙の文化の大きなポイントだと思うんですね。たとえば人形を作るのに使う縮緬紙(ちりめんがみ)ができたり、物を包むための紙や、宝生焼きのように鍋の代わりにしたり、非常にレパートリーの広いジャンルで使われる素材になった。影が映る障子もそのひとつで、日本人が影についての関心が深くなったのも、やはりこの紙というものがとても大きな存在になっているんです。

もうひとつ重要なのは、折り紙ができたことですね。今度は、紙を立体に使うという発想が遊びの中から生まれてきて、大きな展開を持ったわけです。現在も、お手拭きだの、服だの、家具や仮設住宅に至るまでいろんな物に紙を応用しているわけですが、そ

の多くは日本人が記録用紙という概念をはずし、新しい思考過程のもとに紙を捉えたという大きなおかげをこうもっているわけです。

そして、その源にあるのは経師(きょうじ)の存在ではないかなと思うんです。奈良時代に仏教が国家事業として推進されて、お経やなんか中国からやってきた時に、それを写経したり、経巻に仕立てたり、虫やネズミに喰われた経典を補修したりする公職として登場したのが経師です。そして、平安時代になって官寺での書写の需要が満たされると、書画全般の製作に広く携わるようになって、今のような職能が確立していったんですね。

西洋には紙をついで補整をして直すという技術はなかなかないんです。羊皮紙とかは上を削って新しく書き直すということができるんですけど、穴の空いた紙をふさぐという修復の仕方はあまりない。ところが経師は、いかに虫に喰われた文章でも、あるいは屏風でもなんでも直してしまう。つまり、日本には少なくとも1300年前ぐらいから紙の工事屋が存在していたわけです。

記録文書としてお経が来たと同時に補修屋もくっついてきて、この補修屋が時代が下って独立するといろんな道具を作り始めたわけです。紙は紙で直さなければいけないわけで、紙を補修する材料としての紙を発明したり、なおかつ補修ができる上にほかの物にも転用できるという材料として圧倒的な力を持つ紙ができてきたわけです。

日本人が紙という素材を複雑で幅の広い使い方をするようになった背景には、経師の存在が大きく関わっていたんだと思うんですね。

写真は、ついに剥いだ新聞紙。経師の手にかかれば、一重の新聞紙のような薄い紙も二つに剥ぐことが出来る。



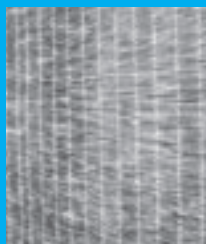
環境・社会活動カレンダー [2008年6月~8月]

- 2008年6月7日~8日 「丸沼高原 森と紙のなかよし学校」を開催
- 2008年6月27日 「シラネアオイを守る会」の植栽活動に参加
- 2008年6月 「日本製紙グループ エコフォト大賞」を開催
- 2008年6月 6月の環境月間の取り組みとして清掃活動や植樹祭、ライトダウンキャンペーンへの参加などを実施

エコフォト大賞を開催

日本製紙グループは6月の環境月間に合わせて、グループ従業員を対象とした写真コンクール「エコフォト大賞」を開催しました。環境について考える機会を持ってもらおうと、環境安全部が企画。61名から計150点の応募をいただきました。反響が大きく好評だったことから、来年度も開催し、継続的な取り組みにしていく予定です。

栄えある技術本部長賞には日本製紙(株)岩国工場の広沢和美さんの作品が選出されました。すだれや雨水の利用など、身近でできるエコ活動を収めた写真は、「環境について考え、行動するきっかけの月」という環境月間らしさが感じられた点が評価されました。



技術本部長賞に輝いた広沢さんの作品

お問い合わせ先

株式会社日本製紙グループ本社
CSR本部 CSR部
〒100-0006
東京都千代田区有楽町1-12-1
(新有楽町ビル)
TEL: 03-3218-9321
FAX: 03-3216-1366
ホームページ
<http://www.np-g.com/inquire/>
(お問い合わせ)
<http://www.np-g.com/appliform/>
(資料請求)

TOPIC

